

ヘミングウェイの短編 “Big Two-Hearted River”

Part I 冒頭部

—教育的文体論を活用した教材—*

小迫 勝

0 はじめに

本論考は、高校および大学レベルの英語教材として、ヘミングウェイ（Ernest Hemingway, 1899-1961）の初期作品集『我らの時代』（*In Our Time*, 1924）に収められた短編の1つ、「2つの心臓の大きな川」（“Big Two-Hearted River”）Part I の冒頭部を取り上げる。本作品は、ノーベル賞作家となるヘミングウェイが、独自の文学を確立するために言語的実験を試みていたと思われる25歳頃の作品である。一般的に、小説の書き出しは、小説家にとって細心の注意をはらい、彫琢を惜しまない部分であると言われる。本作品にもそれが実感される。そこで、語り始めの数段落について、その言語的特質を抽出し、英語学および文体論の基本的知見を活用して分析し、解釈を試みる。さらに、この作品の言語的特質とテーマとの関連性を探りながら、ことばの芸術を鑑賞したい。洗練された英語を読む楽しさを味わうと同時に、関連する英語学および文体論の知見が、英語を読む力だけでなく、聞き、話し、書く力をも涵養する一助となりうることを見出すことができる。幸いである。

0.1 文体論（Stylistics）

文体論には、いくつかの異なるアプローチがある。なかでも英語を客観的な方法で分析し、合理的解釈に導くと思えるのは、1960年代になって記述言語学や文法の研究が進むことによって、とくにイギリスやアメリカで盛んになった文体論である。その文体論は、文学テキストを主な対象とする。そのアプローチの原点は、読者の直観（intuition）である。直観に基づいて英語の特質を見極め、客観的な分析をとおして解釈に導く。同時に、その特質が、作品のテーマとどのように関わっているのか、言語芸術の構築にどのように貢献しているのか、について明らかにし評価するのである。

文体論は（文学と言語学の橋渡しをする）折衷主義（eclecticism）をとる。中でも Henry G. Widdowson (1992) が提唱した教育的文体論は、英語を母語とする人たちだけでなく、外国語として学ぶ人たちにとっても、言語や文学を研究する上で重要なツールとなっている（Wales 2001, 372-73）。

1 第1段落

The train went on up the track out of sight, around one of the hills of burnt timber.

Nick sat down on the bundle of canvas and bedding the baggage man had pitched out of the door of the baggage car. There was no town, nothing but the rails and the burned-over country. The thirteen saloons that had lined the one street of Seney had not left a trace. The foundations of the Mansion House hotel stuck up above the ground. The stone was chipped and split by the fire. It was all that was left of the town of Seney. Even the surface had been burned off the ground.

1.1 登場人物の視点と視野

本作品において、唯一の登場人物はニック（Nick）である。彼が、キャンピングを楽しむためにシーニーの町で列車を降り、貨物係が放り出してくれた自分のテントと寝具類の袋に座って、列車を見送るところから語り始められている。その情景をはじめ、その後の展開は、ニックの目を通して語られる。

文体論は、テキストの言語的特質が伝える意味（有意性）を問題とする。その言語的特質を内包する物語中の出来事や状況は、どのような視点（point of view）から、あるいは視野（perspective）において、語られているのかが重要であるとする（Verdonk 2002, 29）。本論では、視線の先の焦点（focal point）も重要な分析項目となる。

1.2 単音節語と 2 音節語が主たる語彙

ニックの目を通した町の情景は、主として単音節の語、たまに 2 音節の語で語り始められている。後で読者に知らされるのだが、ニックは日常の煩雑さや種々の重荷から心を解き放つために一人旅を楽しんでいるのだ。ニックのその時の気分を語るには、身近で肩のこらない素朴な単音節語、2 音節語が相応しい。ちなみに、第 1 段落の語りを構成する語彙の語源をみると、“train,” “around”の 2 語はおそらく古フランス語に由来する外来語であるが、その他はすべて古英語などチュートン（Teuton）系の語彙に由来している。つまり、英語母語話者には馴染み深い語で語られている。

1.3 無関係代名詞構文

ニックが、テントと寝具類の包みに座った場面を以下に再録する。

Nick sat down on the bundle of canvas and bedding the baggage man had pitched out of the door of the baggage car.

この語りには、“bedding” の後ろに関係代名詞（の目的格）が用いられていない。このような無関係代名詞構文（zero relative pronoun）は、くだけた話し言葉に特有のものである（Carter & McCarthy 2006, 317b, 317h）。単音節および 2 音節の語の使用とともに、この無関係代名詞構文は、読者を親しみやすい話し言葉の世界に引き込んでいる。

1.4 詩的言語

本作品は、散文の短編小説であるが、冒頭部は詩的な韻文の特質が組み込まれている。以下に見るように、頭韻をはじめ、韻律を内包する文構成、語りの内容を模写した象徴的な語（句）や文構造などが、この冒頭部の言語的特質を形成している。

1.4.1 音感覚的な語

まず、“train”と“track”が、/tr/という歯茎後方破擦音（post-alveolar affricate）による頭韻（alliteration）を踏んでいることに気づくであろう（Gimson 1980, 177）。この頭韻は、列車が重々しく動き始めた時の音を「音感覚的」（phonaesthetic）に模写（imitation）している。音感覚（phonaesthesia）という術語は、phone（音）と aesthesis（Gr. αἴσθησις a perceiving = 感覚）との合成語である。つまり、外界の事物を音的に連想させる模写的な語使用を言う。Leech & Short（2007², 188）は、文学的なテキストに顕著な模写的言語として2種類を区別している。よく知られているのは擬音（擬態）的（onomatopoeic）な語である。例えば、*cuckoo*, *whisper*, *bang*などであり、指し示された外界の音（容態）そのもののよう聞こえる語を言う。さらに、音感覚的な語を指摘している。例えば、*clutch*（ぐいとかむ）、*cling*（しがみつく）、*clinch*（突き出た先を折り曲げてつぶす）、*glimmer*（かすかに明滅する）、*glitter*（ぴかぴか光る）、*glow*（炎をあげず真っ赤に燃える）などであり、その意味と何らかの関連性を感じさせる語を言う（Wales 2001, 363）。

1.4.2 韻律的模写（metrical iconicity）

語り始めの文をゆっくり音読してみよう。詩的な律動を感じることができるであろう。その律動は、つぎの韻律分析が示すような強勢の規則性に起因している。なお、韻律分析に使用されているアクセント記号は、強勢の有無を示している。例えば、Thè は強勢のない音節、tráin は強勢のある音節を示している。

Thè tráin | wènt ón | ùp thè tráck | òut òf síght, | àròund óne | òf thè hílls | òf
bùrnt tímbèr.

文頭は、“Thè tráin | wènt ón”と韻律分析できるように、弱強格（iambus）が2度繰り返されている。列車がゆっくりと、しかも力強く動き始める様子を模写している。それに続く“ùp thè tráck | òut òf síght, | àròund óne | òf thè hílls | òf bùrnt tímbèr”という弱弱強格（anapest）の繰り返しは、列車が、スピードに乗り線路の等間隔の切れ目による規則的なリズムを刻んで走り去って行く様子を彷彿とさせる。韻律による音響の模写と言える。

さらに列車が丘陵の向こう側に走り去り、音も聞こえにくくなった聴覚イメージを、“tímbèr”という強勢のない音節で文を終えることによって暗示している。この韻律的模写は、詩の行末に見かける女性韻（feminine ending）を思わせる。

1.4.3 頭韻

以下に再録する語り始めの描写には、既述の /tr/ による頭韻のほかに、両唇破裂音 (bilabial plosive) の /b/ による頭韻も目立っている。

The train went on up the track out of sight, around one of the hills of *burnt* timber. Nick sat down on the *bundle* of canvas and *bedding* the *baggage* man had pitched out of the door of the *baggage* car. There was no town, nothing *but* the rails and the *burned-over* country. (強調は筆者)

列車が、丘陵を走り去る様子を目にしたとき、ニックは、樹林が激しく燃えた時の音を想像しているのであろうか。“burnt” の語頭の /b/ が、引き金となっているかのように、その後には、“bundle,” “bedding,” “baggage,” (2回) “but,” “burned” のように、/b/ 音による頭韻が続いている。あるいは、この /b/ は、列車の貨物係がニックの荷物を放り出した時に、ニックの耳に響いた音を模写しているとも考えることができよう。

1.4.4 /st/ の音象徴

焼失したシーニーの町の描写に見られる “street,” “stuck,” “stone” には、/st/ が語頭で繰り返されている。この音は、無声歯茎摩擦音 (voiceless alveolar fricative) の /s/ と、無声歯茎破裂音 (voiceless alveolar plosive) の /t/ が結合したものである。同時に “chipped” における口蓋歯茎破擦音 (palato-alveolar affricate) の /tʃ/、“split” における無声歯茎摩擦音 /s/ と無声両唇破裂音 (voiceless bilabial plosive) の /p/ とが結合した /sp/、さらに “fire” における無声唇歯摩擦音 (voiceless labio-dental fricative) の /f/ といった、耳障りな無声の摩擦音、破擦音、破裂音が混在している。火災が発する騒音を連想させる音象徴として働いている。

1.5 鍵語 (key-word) としての “surface”

シーニーの「町」の「地面」(surface) は、猛火の勢いで焼けただれている。以後、“surface” という語は、度々出現する。鍵語として意図されているのは明白である。焼き払われて荒涼とした地面と、後で語られる川の「水面」(surface) は、対照をなしている。川の水面は、それ自体を含めて、その上空と水面下に多彩な癒しの世界が広がっている。

2 第2段落

Nick looked at the burned-over stretch of hillside, where he had expected to find the scattered houses of the town and then walked down the railroad track to the bridge over the river. The river was there. It swirled against the log piles of the

bridge. Nick looked down into the clear, brown water, coloured from the pebbly bottom, and watched the trout keeping themselves steady in the current with wavering fins. As he watched them they changed their positions by quick angles, only to hold steady in the fast water again. Nick watched them a long time.

2.1 過去完了形と定冠詞が表わすニックの過去の経験

ニックが、丘陵斜面の現況を確認する語りにおいて、過去完了形 (he had expected to find) が用いられている。彼は、火災以前の状況を記憶していた、と解釈できる。さらに、線路を辿って行き着いた川 (the river) と、それにかかる橋 (the bridge) などに、定冠詞 “the” が用いられている。これらも、ニックにとって馴染み深いものであることが読者に知らされる。同時に、読者も馴染み深さを彼と共有するように誘われる。

2.2 文末焦点化された直示語

上記の “The river was there” という文は、特定の川の存在について語っている。火災で変わり果てた町並みとは対照的に、その川は変わることなく、眼下の「そこに」存在していたのである。文末に置かれた “there” に焦点が当てられ、川をそこに確認できたニックの喜びを読者に伝えている。修飾語のない単純な文構造も、感嘆の気持ちをよく伝えている。なお、ニックとの空間関係を直接的に示す副詞の “there” は、直示語 (deictics = Gk δεϊκτικ pointing or showing) と呼ばれるものの 1 つである。直示語は、登場人物の感覚を読者の感覚と共有させる上で有効であるが、後述するように、本作品においてその働きが顕著である。

少し前の語りにおいて、焼き払われた町を目の当たりにして、「およそ町と言えるものは何もなかった」 (There was no town) と嘆いている。この一般的な町と言えるものの存在を否定する構文と、特定の川の存在を表わす構文 (The river was there) は、単純な文構造をもって対比を際立たせている。

2.3 詩的な撞着 (矛盾) 語法

ニックは、橋の上から「澄んだ褐色の水」の中を覗き込んでいる。

Nick looked down into the *clear, brown water*, coloured from the pebbly bottom, ...

「澄んでいるのに褐色の水」という一見矛盾した語法 (oxymoron) に、読者は一瞬疑問を感じるであろう。実は、その褐色は、水底の小石の色が透けて見えているのだ。褐色は、町の焼けた土や石を連想させるが、対照的にそれを浄化するように澄んだ水は、ニックの心に潤いと癒しを与えていると思われる。詩的な撞着語法の効果である。

2.4 英語母語話者が好む SVO 文型

第 2 段落 5 行目の “and” に導かれる文の型に注目しよう。

Nick ... watched the trout keeping themselves steady in the current with
wavering fins.

この文は SVOC 型の文型に見えるかもしれないが、SVO 型の文型と考えられる。つまり、“trout” 以下は、“watched” という他動詞の (trout を主語とする) 目的節が埋め込まれていると考えるのである (安藤・澤田 2001, 98)。命あるかのように流動する川の流れに抵抗して、マスがヒレを動かしながら不動の姿勢を保とうとしている姿を、ニックは凝視しているのである。その後も、以下のイタリック体が示すように、SVO 文型が続く。

*As he watched them they changed their positions by quick angles, only to hold
steady in the fast water again. Nick watched them a long time.*

Leech & Short (2007², 187 ff.) は、「統語的図像性」(syntactic iconicity) という概念を用いて、それぞれの言語の使用者が好む統語法を説明している。それぞれの言語話者が用いる語順は、現実世界を理解する仕方を模倣したものであるという。統語的に VSO (アラビア語など) や SOV (日本語など) の語順を好む人々がいる一方、英語母語話者は現実世界を SVO の語順で理解することを好む傾向があるのだ。この SVO 文型は、文の末尾を重くする “end-weight”、および文末を焦点化する “end-focus” と密接に関わっている。例えば、英語母語話者は、自動詞のみを用いた述部 (*e.g.*, Mary sang) を避け、目的語を伴う述部 (*e.g.*, Mary sang a song) を用いて文末を重くする傾向があると言われている (Leech & Svartvik 1975, 450)。

3 第 3 段落

He watched them holding themselves with their noses into the current, many trout in deep, fast-moving water, slightly distorted as he watched far down through the glassy convex surface of the pool, its surface pushing and swelling smooth against the resistance of the log-driven piles of the bridge. At the bottom of the pool were the big trout. Nick did not see them at first. Then he saw them at the bottom of the pool, big trout looking to hold themselves on the gravel bottom in a varying mist of gravel and sand, raised in spurts by the current.

3.1 長文と短文の対照

水面が橋の杭の抵抗にあって、盛り上がりながら押し進んでおり、マスたちは、速い水

流に鼻を向けて不動の姿勢保持に努めている。これらの川の多彩な表情を、ニックは長い時間にわたって息を凝らして見入っている。その時間の長さが、長文によって模写的に表わされている。その後、最初は見えていなかった大きなマスを淵の底に発見する。その驚きが、対照的に短文 (At the bottom of the pool were the big trout) で表わされている。

3.2 能動の現在分詞と受動の過去分詞の対照

マスは、速い水 (fast-moving water) の流れの中に鼻を入れ、水流の抵抗を最小にして静止状態を保とうとしている。マスの能動的な姿を表わす現在分詞 “holding” と、それでも水の流れに抗しきれず、わずかに身を歪められ、受動の姿を示す過去分詞 “distorted” が対比されている。ニックは、この対照に命の営みの妙を見出しているのであろうか。

3.3 透きとおって凸状に流れる水面の流動と杭の静止

既述のように、焼失した町の大地の表面 (surface) は、焼けただれて静止した状態であった (Even the surface had been burned off the ground)。対照的に、川の窪みの水面 (surface) は、透明で凸状であった。その水面は、押し進み、(人間が築いた) 丸太の杭の抵抗にあっても、しなやかに膨らんでいた (its surface pushing and swelling smooth against the resistance of the log-driven piles of the bridge)。(静止状の) 杭の抵抗にあっても、川の水面は受動的な過去分詞ではなく、能動的な活動 (action) を表わす現在分詞 (pushing and swelling) を用いて語られている。水面は、流れを押し進め、膨らんでおり、あくまで能動的である。川は、無生物ではあるが、その動きはあたかも心臓の鼓動に発しているかのようにニックは感じているのであろう。

第 2 段落では、橋桁の杭が (静止した状態で) (動的な) 水流に「抵抗」している姿を間接的に語っている (It swirled against the log piles of the bridge)。一方、第 3 段落では、丸太の杭の「抵抗」を “resistance” ということばで直接的に抽象している (against the resistance of the log-driven piles)。この語 (resistance) は、後述するように、第 4 段落で “unresisting” という反意語に形を変えて使用されている。反意語とはいえ、同じ意味領域内の語が繰り返されており、意味のつながりをもたらす「結束性」(cohesion) が意図されているようだ (Short 1996, 352)。「結束性」は、テーマとの関連性 (relevance) を読者に考えさせる契機となる。

3.4 水面と水底の対照

水面 (surface) と対照をなす川底 (bottom) に、ニックは大きなマスたちを目にする (At the bottom of the pool were the big trout)。場所を表わす副詞句 “At the bottom of the pool” が文頭に倒置され、主部の “the big trout” が文末に置かれて焦点化されている。既述のように、最初は見えなかった「大マス」を、水底に発見したニックの驚きが表現されている。

3.5 砂利と砂による能動と受動そして一体化した姿

砂利と砂が、水流の勢いで巻き上げられて多様に姿を変えている (in a varying mist of gravel and sand, raised in spurts by the current)。ここにも、砂利と砂という無生物が織りなす能動 (varying) と受動 (raised) の一体化した姿が見られる。ニックは、そのような有機体を思わせる無機体の動きに感銘を覚えているようだ。

一方、水流が作り出した砂煙りの中では、大きなマスが、水流の影響を受けながらも、それに抗して、静止状態の保持に努めている (looking to hold themselves)。大マスと砂煙りは、共に受動と能動が一体化した姿を見せており、「首尾一貫性」(coherence) が見られる。「首尾一貫性」とは、Short (1996, 352) によれば、テキストのある部分と別の部分が、明白な形で結束している訳ではないが、読者が推測によって関連性を見出すことができる言語的特質を言う。

4 第4段落

Nick looked down into the pool from the bridge. It was a hot day. A kingfisher flew up the stream. It was a long time since Nick had looked into a stream and seen trout. They were very satisfactory. As the shadow of the kingfisher moved up the stream, a big trout shot upstream in a long angle, only his shadow marking the angle, then lost his shadow as he came through the surface of the water, caught the sun, and then, as he went back into the stream under the surface, his shadow seemed to float down the stream with the current, unresisting, to his post under the bridge where he tightened facing up into the current.

4.1 不定冠詞 “a” の結束性

これまでニックの視野は、橋の上から下方の川へ向けられていた。そして彼の視線の先は、川面から川中、川底へと移り、砂利や砂とマスなどの表情を捉えていた。一転してニックの視野は上空へと向けられる。

It was *a hot day*. *A kingfisher* flew up the stream. It was *a long time* since Nick had looked into *a stream* and seen trout.

視野の転換に伴って、ニックは現況と過去の経験とを俯瞰する。その日は暑い1日 (a hot day) であった。1羽のカワセミ (a kingfisher) が川を上って翔んできた。川 (a stream) を覗き込んでマスを見るのは久しぶりのことだった。これらの俯瞰において、不定冠詞 “a” が繰り返されることで、ニックの意識は、特殊から一般へと転換していることが読者に伝えられる。結束性の効果である。

4.2 基準と逸脱

文体論では、言語的基準 (linguistic norm) と言語的逸脱 (linguistic deviation) という概念を用いることがある。画家は、注目してほしい主題を、背景 (background) の前面に大きく描く。いわゆる前景化 (foregrounding) によって、卓立 (prominence) の効果を狙うのである。この手法を文学の分析に援用するのである。つまり、文学テキストにおいて、基準 (norm) となる言語組織を背景として、その基準から逸脱 (deviation) している言語的特質は、前景化されていると考えるのである。前景化された特質は、その芸術的意図、テーマとの関連性、およびその選択の適切性 (relevance) が評価の対象となる (Leech & Short 2007², 39)。

4.3 冒頭部のクライマックス・シーンを語彙的に導入する擬態的な “satisfactory”

既述のように、単音節、2音節の語が、本短編における語彙の基準 (norm) となり、いわば、語彙的背景を形成している。これらの語彙を背景として、5音節から成る多音節語の “sat-is-fac-to-ry” は、極めて目立つ語と言える。この語を前景化した意図を探ってみよう。まず、“They were very satisfactory” の主語である “They” は、何を指しているのだろうか。「川を覗き込んでマスを見るのは久しぶりのことだった」(It was a long time since Nick had looked into a stream and seen trout) とニックが述懐した直後に、「それらはとても満足のゆくものであった」と語られている。その文の主語である “They” は、直前のマスたち (trout) を指していると解するのが自然であろう。形容詞 “sat-is-fac-to-ry” は、久しぶりに目にしたマスたちの身体が長く大きいことを、多音節によって擬態的に模写していると考えられる。そのように大きなマスに、ニックは満足したのだ。

不定冠詞 “a” の頻出のみならず、第4段落を構成する語彙における音節数の多様性も、本段落における新たな展開を暗示している。例えば、3音節の “king-fish-er”、4音節の “un-re-sist-ing” が散見される。中でも目立つ語が、この “sat-is-fac-to-ry” である。この語の選択を口火に、様々な言語的工夫が織り込まれ、カワセミと大マスとのクライマックス・シーンが語られる。

4.4 多彩な直示語

第4段落において、ニックが目にする対象 (人称代名詞を含む) が活動する場所、時間、方向などを直接に示す直示語の働きが多彩である。直示語は、読者が小説中の登場人物と経験を共有する上で効果的である (Verdonk 2002, 34 ff.)。

4.4.1 時間的差異を表わす直示語

カワセミが、獲物を得やすい場所に急ぎ飛来する場面では、その飛翔を表わす (直示語の) 動詞は “flew” である。動詞 *fly* の意味は、*OED* によると “to pass quickly through the air” であり、意味特性 (semantic feature) として、[すばやく] ([+quickly]) を含んでいる。その後、獲物を見定めるために川を上る飛翔は、“moved” という類義語に「優

雅に変異」(elegant variation) している。動詞 *move* の意味は、“to change the place or position” であり、[すばやく]という意味特性を内包しているわけではない。カワセミが、目的に応じて飛翔の速度を変えている様子を、ニックは細かく観察しているのだ。

一方、「大マスは、突然川上に向けて、勢いよく長い距離にわたって角度をつけて移動した」(a big trout shot upstream in a long angle)。その動きを表わす動詞 *shoot* (= to go swiftly and suddenly) は、「すばやく」([+swiftly]) と「突然に」([+suddenly]) という意味特性を含んでいる。カワセミの視線を外そうとする大マスの緊迫した動きを、ニックは興味深く観察しているのだ。

獲物を狙うカワセミと、獲物として狙われている大マスの、それぞれの動きの時間的差異が、直示語の動詞だけでなく、副詞句にも反映している。カワセミ (の影法師) が、獲物を見定めるためにゆったりと飛翔する方向は、3 語の副詞句 “up the stream” で表わされている。一方、大マスが突然に勢いよく動く方向を表わす副詞は、1 語の “upstream” である。獲物を狙う主体と客体において、動きに時間的長さの差異が観察されたことが、語数の異なる類似の表現で模写的に表わされている。

4.4.2 “his shadow” が表わす 2 つの意味

As the shadow of the kingfisher moved up the stream, a big trout shot upstream in a long angle, only *his* shadow marking the angle, ...

上掲の “his shadow” の “his” は、何を指しているのでしょうか。代名詞は、直前に言及された名詞の代わりをする、というのが一般的な理解である。すると、“his shadow” の直前の名詞は、“a big trout” である。一方、そのすぐ前には “the shadow of the kingfisher” が言及されている。同一表現の繰り返しを避けて “his shadow” に優雅に変異させているとも考えられるのだ。Carter & McCarthy (2006, 375) によれば、代名詞の意味は、それが生起する脈絡に依存すると言う。上の脈絡において、これら 2 つの意味の可能性は、どちらも看過できないであろう。

4.4.2.1 人称代名詞 “he” はカワセミを指すと前提した解釈

まずは、結束性の原理のもとに、“the shadow of the kingfisher” を “his shadow” に「優雅に変異」させていると前提して解釈を進めてみよう。すると、“only *his* shadow marking the angle” は、川面に映ったカワセミの影法師だけが、大マスの移動した角度をマークしたことになる。上空を飛翔するカワセミ本体は、川に視線を注ぐニックの目には入らないのである。それ以後の展開をみよう。

then lost his shadow as he came through the surface of the water, caught the sun, ...

この部分は、「それからカワセミが水面を縫うようにやってきて（狙った大マスではなく、川面に映った）太陽をつかんだとき、彼は影法師を無くした」と解釈することができる。「影法師を無くした」とは、カワセミ本体が水面に降りて来て水面を乱したので、それまで映っていた影法師は消えたのだ。と同時に、ニックはカワセミ本体を見たのである。なお、このクライマックス・シーンにおいて、鍵語である水の“surface”がその舞台となっている。

4.4.2.2 意味に齟齬をきたす場面の展開

その直後の場面は、前後の語りの「結束性」を示す“and”と、時間経過を示す直示語“then”に導かれている。

and then, as he went back into the stream under the surface, his shadow seemed to float down the stream with the current, unresisting, to his post under the bridge where he tightened facing up into the current.

彼（he）が水面下の流れに戻る直前の場面までは、“he”がカワセミを指すという解釈は適切であることを見てきた。しかし、彼（he）が、水面下の流れに戻る場面に至って、意味に齟齬をきたすことになる。つまり、“went back into the stream”という動きの方向を示す直示表現によって、この文の主語“he”は、上空から降りてきたカワセミではありえず、水面に上がってきた大マスを指すことは明らかである。この時点で、もう1つの意味の可能性を探る必要が生じている。つまり、“he”と“his”は、カワセミに狙われている大マスを指すという前提で、文脈を振り返って解釈を試みなければならない。

4.4.2.3 人称代名詞“he”は大マスを指すと前提した解釈

「結束性」の原理と区別するのが容易ではないとされる「首尾一貫性」の原理に基づいて、別解釈を試みてみよう。「首尾一貫性」の原理は、既述のように、明白な「結束性」は認められないが、推測によって関連性を見出すことが可能である場合に用いられる。以下に当該の場面を再録する。

As the shadow of the kingfisher moved up the stream, a big trout shot upstream in a long angle, only *his* shadow marking the angle, ...

代名詞“his”は、大マスを指すと前提すると、“only his shadow”は、淵深く潜む大マスが、橋上のニックには、はっきりとした姿ではなく、影としてのみ見えている、という解釈にたどりつく。つまり、微かな影としてだけ見える大マスが、長く角度をつけてさっと泳ぐのが見えたのである。その後続く文脈は如何であろうか。

then lost his shadow as he came through the surface of the water, caught the sun, ...

この部分の解釈は、「大マスが、水面を貫くように上がってきて、太陽の日差しを浴びたとき、(それまでの) 影 (のような微かな姿) を失った」ということになる。つまり、“lost his shadow” とは、ニックが、大マスの姿をはっきりと見たことを表している。

4.4.2.4 大マスが水面から下の流れに戻る前後のニックの視線

水面で、カワセミと大マスが急接近するクライマックス・シーンに至るまでは、“he” と “his” は、カワセミと大マスの両方を指しているという解釈が成立した。これは、どのように考えられるであろうか。この意味の二重性は、ニックの視線が、カワセミの影法師と微かにしか見えない大マスの両方に、ほぼ同時並行的に注がれていることを示す表現上の工夫であると考えられないであろうか。大マスが水面に上がってきたとき、それを目掛けて、カワセミが水面に翔び降りたのである。大マスが攻撃を逃れて、水面下に戻った時、カワセミは再び上空へ翔び上がったことになる。この翔び上がった直後のみ、ニックの視線は大マスだけに注がれていたのである。それでは、カワセミが水面から翔び上がった後、ニックの視線はどこに注がれたのであろうか。

4.4.2.5 大マスが水面下に戻った後の場面で “he” が大マスを指すと前提した解釈

and then, as *he* went back into the stream under the surface, *his shadow* seemed to float down the stream with the current, unresisting, to *his post* under the bridge where *he* tightened facing up into the current.

上掲の文脈において、「そしてそれから、大マスが水面下の流れに戻ったとき、大マスの影 (のような微かな姿) は、流れに逆らわず、橋の下のいつもの自分の居場所まで漂うように下ってゆき、そこで身を引き締めて流れと対峙した」という解釈になる。カワセミの出現直後とは対照的に、大マスは流れに抵抗せず (unresisting)、自らは静止した状態で、水流に乗って川を下っているように見えたのである。危機を脱した大マスが、静と動の一体化した撞着性を見せているのを、ニックは面白く眺めているのであろう。なお、橋の下で身を引き締めた (tightened) 大マスの姿は、以前の平穏時のマスたちの姿と「首尾一貫」している。この場面では、[線状に流れる水]を意味素性とする “stream” と、[流れ] を意味素性とする “current” とが結束して、川の流れを強調している。

4.4.2.6 大マスが水面下に戻った後の場面で “he” がカワセミを指すと前提した解釈

一方、人称代名詞の “he” と “his” が、カワセミを指すと前提して解釈を試みてみよう。

すると、「そしてそれから、大マスが水面下の流れに戻ったとき、(川面に映った)カワセミの影法師は、流れに身を任せて橋の下の自分の定位置まで漂うように下って行き、そこで静止して川の中を直視した」という解釈も不可能ではないと思われる。川面から翔び上がったカワセミは、川下へ向かって自分の力で翔んで行ったのである。したがって、川面に映ったその影法師は、川の流れに乗って漂っているように、ニックの目には映ったのだ。カワセミの影法師が、橋の下の定位置で川面に静止する為には、カワセミ本体は、空中で停止するための羽ばたきを続けねばならず、それほど長い時間ではなかったことが想像される。

かくして、大マスが水面下に戻った後の場面においても、それ以前と同様に、ニックの視線は大マスとカワセミに、ほぼ同時並行的に注がれていたと解釈することができる。両者が演じる動と静の対照性、あるいは、それらが一体化した撞着性は、川の流れと水面が演出する面白さである。同一の代名詞に異なる意味を担わせることによって、語用論的 (pragmatic) な意味の二重性を内包した言語芸術を創出していると考えられる。読者は、実生活会話 (discourse) において、同じ言葉が、脈絡に応じて、それぞれ特有の意味を帯びるという語用論的な意味の多層性を経験的に知っているであろう (Leech & Short 2007², 204)。

5 おわりに

ニックは、その後、丘の上に登りテントを張ってキャンプする。Part 2 では、次の朝早くテント近くで多くのバッタを捕獲し、それを餌としてマス釣りを楽しむ。

さて、この作品のタイトルにある「2 つの心臓」とは、何を意味するのであろうか。ニックは、川が演出する多彩な癒しの世界を堪能している。川は流動性を本質とする。川の水面と水中と水底それぞれに、命の鼓動を感じているようだ。川は無機物でありながら、ダイナミックな鼓動を止めない心臓を有する生物であるかのように、ニックは感じているのであろう。

一方、川中のマスたちも、大きなエネルギーを感じさせる。彼らは、川の勢いに押されて形をゆがめながらも、流れに抵抗し「静止」を志向している。マスを狙うカワセミも、生命感溢れる動きを見せている。カワセミと大マスは、それぞれに動と静の対照と、ときにその一体化を見せながら、心臓の鼓動を感じさせている。川という無生物と、その水面を境にしてその上下で活動する生き物たちの両方に、ニックは生き生きとした命の輝きを見出しているのであろう。

模写的、象徴的な語、句、文構造の選択をはじめ、対照性、撞着性、人称代名詞の意味の二重性などを本作品冒頭部の主たる言語的特質として、その有意性を考察してきた。2 つの心臓の大きな川という意味を考えさせる素材として、これらの言語的特質を創出したヘミングウェイの言語芸術を、ともに鑑賞できたとすれば幸いである。

注

本稿は、第 39 回岡山英文学会（2016 年 10 月 8 日開催）において特別講演した内容に加筆したものである。

テキスト

Ernest Hemingway (1944) “Big Two-Hearted River” Part I in *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories*, Penguin Modern Classics.

引用文献

安藤貞雄・澤田治美（2001）『英語学入門』開拓社.

Carter, Ronald & Michael McCarthy (2006) *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide, Spoken and Written English Grammar and Usage*, Cambridge U. P.

Gimson, A. C. (1980³) [1962] *An Introduction to the Pronunciation of English*, Third Edition, Edward Arnold.

Leech, Geoffrey & Jan Svartvik (1975) *A Communicative Grammar of English*, Longman: Harlow.

Leech, Geoffrey & Mick Short (2007²) [1981] *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*, Pearson Education: Harlow.

Oxford English Dictionary (1989) Second Edition, CD-ROM, Oxford University Press.

Short, Mick (1996) *Exploring the Language of Poems, Plays and Prose*, Longman: Pearson Education.

Verdonk, Peter (2002) *Stylistics*, Oxford University Press.

Widdowson, Henry G. (1992) *Practical Stylistics*, Oxford University Press.

Wales, Katie (2001) *A Dictionary of Stylistics*, Second Edition, Longman: Pearson Education.